世界名作劇場

小公女セーラ
（プリンセス）

『親切なお嬢さま』

第８話

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第8話「親切なお嬢さま）」

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
マリエット
モーリー（エンマを改名します）
ラビニア
ガートルード
ジェシー
アーメンガード

ロッテイ

女生徒たち

エミリー（人形）

シーザー（猫）

ボナパルト（オウム）

1

ミンチン女学院・遊戯室

アメリアが手拍子を打ち——セーラ、ラビニア以下の女生徒たちが、それぞれ頭上に教科書をのせ、姿勢正しく歩く稽古をしている。

アメリア「はい、顎を引いて……足は、爪先から、すっと出すのですよ」

その中で、危かしく歩いているロッティ。

アメリア「ロッティ、人にぶつからないように」

おどおどと前かがみのアーメンガード。

アメリア「アーメンガード、もっと姿勢を正しく……でないと、お行儀のいいレディになれませんよ」

途端に教科書を落すアーメンガード。

その中で、姿勢正しく頭上に本をのせて歩くセーラ。

アメリア「そうそう、セーラさんのように歩くのです」

キラッと見るラビニア。

セーラが、アメリアの視界から遠のくのを狙って廻り込み、すれ違いざますっと足を引っかける。

もろにつんのめって倒れるセーラ。

アメリア「（仕掛に気づかず）おやおや、セーラさんも気をつけて」

ラビニア、ガートルードとジェシーと冷笑を見合せて、

女生徒の動きの中にまぎれる。

立上ったセーラに、ロッテイとアーメンガードが近寄る。

アーメンガード「大丈夫？　セーラ」

セーラ「え、ええ……」

ロッテイ「（小声で）私、見たわ。ラビニアが足を出したんだもん」

セーラ「（微笑）いいのよ、ロッテイ」

セーラ、教科書を頭上に、動きの中に加わる。

2 同・廊下

振鈴が鳴る——
遊戯室のドアが開き、わっと出て来る女生徒たち。
アメリアが追いかけるように出て呼ぶ。

アメリア「皆さあん、次はダンスの時間ですから、着換えて来るんですよォ」

一同「はあい……」

3 同・階段下

駆け上って行く女生徒たち。
脅えたように物蔭でやりすごした石炭バケツを手にしたベッキーが、遊戯室へ向おうとする。
その時、ひと足遅れて来るセーラ。

セーラ、はっと立停る――

ベッキーも、セーラに気づいて驚いて足が停る――

セーラ「ベッキー」

ベッキー「は、はい……」

急に辺りを気にして、

ベッキー「あの、お嬢様方と口をきくと叱られますから……」

頭を下げると、廊下の端を逃げるようにすり抜けて去る。

茫然と見送るセーラ――

4 同・セーラの寝室

セーラにダンス服の着換えを手伝っているマリエット

――

セーラ「ね、マリエット……」

マリエット「は……？」

セーラ「教室のお掃除に来るベッキーの事だけど……」

マリエット「あの子が、どうかいたしまして？」

セーラ「私達と口を聞いてはいけないって、云われてるのかしら」

マリエット「ええ……学校の規則らしうございますから」

セーラ「まあ……」

マリエット「それに、あの子は、まだ馴れないで失敗ばかりですから。院長先生も、なるべくお嬢様方の前に出させるなと仰言やったとかで」

セーラ「可哀想ね……」

マリエット「無理もございませんわ。私も、新米のメイドの時は、半年も御主人様の前に出られない程でしたもの」

セーラ「遠い所から来てるの？」

マリエット「ええ、ロンドンから大分離れた小さな村らしうございますよ。なんでも、父親が亡くなって、幼い弟や妹た

ちの為に働きに出なければならなかったとかで」
セーラ「で、いつも、どんな仕事を……?」
マリエット「そりゃ、お嬢様には想像もつかない程、辛い仕事です
わ……」

5 働くベッキーのモンタージュ

暗い早朝——水をくむベッキー。
マリエットの声「朝は、暗いうちに起きて、水くみから、表のお掃
除——」
玄関をはいつくばって拭くベッキー。
× × ×
マリエットの声「それが済むと、お嬢様方の朝食の支度の手伝いと、
あと片附け……今度は、石炭を運んだり、暖炉の
お掃除……」

人気のない教室で、暖炉の掃除をするベッキー。

× × ×

マリエットの声「それから、一般の生徒さん達の洗い物のお洗濯から、アイロン掛けに、靴磨き……」

地下の作業場で、女生徒たちの靴を磨くベッキー。

× × ×

マリエットの声「お嬢様方の夕食の後片附けが終って……」

地下の洗い場で、皿を洗うベッキー。

× × ×

マリエットの声「自分の屋根裏部屋に帰れるのは……」

三階の廊下を、重い木靴を曳いて屋根裏部屋に向うベッキー。

6

同・セーラの寝室

マリエット「……もう、夜の十二時を過ぎているのではございませんかしら」
セーラ「……そうだったの」
心打たれて、低く続ける。
セーラ「私、あの子の事が、ずっと気にかかっていたのよ……」

7 同・ラビニアの部屋

鏡の前で、ウロウロとダンス服を整えているアーメンガード。
ラビニアが来て、押しのける。
ラビニア「どいてってば……」
突きのけられて、脅えるアーメンガード。
アーメンガード「また、御機嫌悪いの？」
ラビニア「なんですって？」

キッとアーメンガードを睨む。

ラビニア「アーメンガード……あんた、私の代りにセーラが代表生徒になって、いい気味だと思ってるんでしょう」

アーメンガード「そ、そんな、違うわ……」

ラビニア「判ってるわ、あんたがどう思ってるか位……云っとくけど、代表生徒なんて、ただのミンチン院長の飾り物よ」

ジェシー「そうよ、そうよ」

ガートルード「ラビニアの云う通りよ」

その時、ドアが開き、洗濯物を捧げたベッキーが、顔を見せる。

ベッキー「あの……」

ラビニア「なによ、ノック位しなさいよ」

ベッキー「す、すんません……洗濯物サ届けに来ましたが……」

ジロッと見たラビニア、つかつかと寄ると、ベッキーの捧げた洗濯物を乱暴に調べる。

ラビニア「なによ、このアイロンのかけ方、シワだらけじゃないの！」

ベッキー「そ、そんな……」

ラビニア、罵ると、置いてあった自分の革靴を取る。

ラビニア「靴の磨き方だって、なってないわ。磨き直しなさいよ！」

いきなりベッキーの胸許に投げつける。

ベッキー「も、申訳けねえス……」

泣き顔で、靴と洗濯物を抱えて出て行くベッキー。

意地悪く冷笑を交すラビニア、ガートルード、ジェシー。

気の毒そうに見送るアーメンガード。

8 同・二階の廊下

それぞれダンス用の服に着換えた女生徒たちが、お互

いの服にさわり合い、お喋りしている。
その中に、ロッテイ。
一方のドアから、ダンス服のガートルードとジェシーが、ラビニアと出て来る。
一斉に振り返る女生徒たち――
ラビニアは、裾の長いドレスを得意気に裾をつまんで近づく。
ラビニア「どう、この服……」
女生徒たち、思わず嘆声をあげる。
ラビニア、優雅に回ってみせる。
ラビニア「お母様が、アメリカから送って下さったのよ…今、ニューヨークでは、この服が一番流行してるんですって」
騒ぐ女生徒たち――
そのあとから、もっそり出て来る地味な服のアーメンガード。

その時、三階から、美しいピンクのドレスを着たセーラが、長い裾を優雅につまんで降りて来る。

どよめく女生徒たち、一斉にセーラを取囲む。

ロッテイ「わあ、凄いドレス……まるでプリンセスみたい……」

×　　×　　×

取り残されたラビニア、ガートルード、ジェシー。

ガートルード「まあ、あんな素敵な服も持ってたんだわ」

ジェシー「きっと、またパリ仕立てよ」

ラビニア「フン……服が立派だって、ダンスが出来なきゃ仕様がないわ……行くわよ」

ガートルードとジェシーを促して階段を駆け降りて行く。

そのあとから、アーメンガード、ロッテイたち、女生徒に囲まれて降りて行くセーラ――

9

同・地下の作業場

山に置かれた玉ネギの皮をむきながら、涙をこすり上げているベッキー。

傍に、ラビニアの靴と、洗濯物——

ひょいとピーターが入って来る。

ピーター「やあ、ベッキー……」

ベッキー、泣き顔をそむける——

ピーター「どうしたんだい……また、叱られたのかい？」

ベッキー、首を振る。

ピーター「だって、泣いたりして……」

ベッキー、泣きながら更に首を振る。

ベッキー「な、泣いてなんて、いないス……こ、この玉ネギの皮が、眼にしみただけッす……」

ピーター、唖然と見守る。

10

同　遊戯室

オルガンの前についているアメリア。
ミンチンが、集ったセーラたち女生徒を見渡す――
ミンチン「では、今日は、ワルツから練習しましょう……ラビニア」
ラビニア「はい……」
ミンチン「あなたはダンスが得意でしたね。まず、最初に踊ってみせてあげなさい」
ラビニア「はい……」
チラリとセーラを優越の眼で見やると、中央に進み、ワルツのポーズをとる。
ミンチンの合図で、アメリアがオルガンを弾き出す――
軽やかに踊り出すラビニア――

11

同・前の廊下

そのオルガンの音が聞えている——
石炭桶を提げて来るベッキー、その音楽に立停る。
思わず石炭桶を床に置き、そっと室内の音楽に耳をすませる。
次第に音楽に引き込まれ、メイド服の裾をつまんで、フワッと回ってみる。
その時、一方から来るモリー。
モリー「ベッキー！ なにをしてるんだよ！」
ベッキー、驚いて小さくなる。
ベッキー「ご、ごめんなせえまし……」
モリー「フン、早く院長先生のお部屋の掃除をおし……暖炉の灰もだよ！」
ベッキー「は、はい、ただいま……」
慌てて石炭桶を提げ上げる——

12 同・遊戯室

得意気に踊るラビニア――

13 同・三階の階段

バケツとモップを手に、木靴を曳いて上って来るベッキー。

ミンチンの部屋のドアへ――

14 同・ミンチンの部屋

バケツとモップを運び込むベッキー。

暖炉の傍に坐ると、火かき棒で灰をかく。

ぱっと灰が舞い、ベッキーにかぶる。

灰だらけで、むせかえるベッキー。

（中C・M）

15

同・遊戯室

女生徒たちの拍手――頷くミンチン。
踊り終ったラビニアが汗を拭う。

ミンチン「セーラさん……」
セーラ「はい……」
ミンチン「ワルツは、御存知ですね」
セーラ「はい……少しですけど、インドにいた時、お父様に習いました」
ミンチン「では、踊ってごらんなさい」
セーラ「はい……」

ラビニアに代って、中央に進み出ると、ワルツのポーズになる。
壁際で、冷笑で顔を見合せるラビニア、ガートルード、ジェシーたち――

ミンチンの合図で、弾き出すアメリア。
セーラ、優雅に踊り出す——
×　　×　　×
見守るラビニアの表情が硬ばる——
×　　×　　×
踊るセーラ——
×　　×　　×
アメリアと満足の微笑で頷き合うミンチン——

16 同・三階の廊下

ミンチンの部屋から、バケツとモップを手に出て来るベッキー。
ふと、セーラの部屋から、マリエットが出て来る。
マリエット「あ、ベッキー……」

マリエット、ベッキーに近づく。

マリエット「私、これから院長先生のお使いで出掛けなければいけないの……それで、お嬢様のお部屋のお掃除を、あなたに頼むように云われてるんだけど……」

ベッキー「お、お嬢様の部屋を……」

マリエット「ええ、ジェームスさんとモリーさんには話してあるわ、じゃ、お願いね」

ベッキー「は、はい……」

マリエット、階段を降りて行く。

茫然と立尽して見送るベッキー、セーラの部屋のドアへ眼を移す。

17

同・セーラの部屋

掃除道具を手に、そっと近づく。

モップとバケツを手に、恐る恐る入って来るベッキー、見廻す。

突然、ボナパルトが叫ぶ――

ボナパルト「セーラ……セーラ……！」

仰天して壁際に逃げ飛ぶベッキー。

オウムと判り、ほっとなると、遠回りに廻り込み、暖炉に行くと、灰掃除にとりかかる――

18 同・遊戯室

踊るセーラ――

× × ×

鋭く見つめるラビニア――

19 同・セーラの部屋

赤く燃え上り始める暖炉――
掃除を終え、石炭を加え終ったベッキー、ほっと立上る。
モップを手に、ジュータン脇の床板をこすりはじめる。
ふっと手が停る――
開いた儘の隣室のドア――
ベッキー、興味を惹かれ、そっとドアに近づく。

20 同・寝室

及び腰でのぞくベッキー、見廻す――
美しいベッドカバー、家具調度――
ベッキー、そっと入って来る。
ベッドに近寄り、恐る恐るクッションを確める。
ベッキー「わあ……フカフカ……」

モップを傍に置き、ベッドに腰をかけると、二度、三度、はずませてみる。
はっと気がつき、立上ると、急いで自分の坐っていた所を払い、ベッドカバーのシワをのばす。
ふと一方の衣裳戸棚に気がつく。
そっと近づくと、ためらったが開く。
——吊られたセーラの服、服、服。
ベッキー「まあ……」
思わず手が伸び、そのひとつを外してみる。
胸に当て、眼についたドレッサーの前に行くと写してみる。
また、はっと気がつき、急いでその服を衣裳戸棚の中に納めると、ベッド脇に置いたモップを取り、辺りを拭く。

21

同・部屋

寝室からモップを動かしながら来るベッキー、はっと見る。
それまで気づかなかった安楽椅子の上に坐っているエミリーの姿——
ベッキー、ぱっと顔が輝き、近づく。

ベッキー「まあ、なんて可愛い人形……」

そっとエミリーを抱き上げてみる。
思わず微笑がこみ上げ、安楽椅子に腰をおろすと、あやすように鼻唄を唄い、その安楽椅子をゆすりはじめる。
ベッキーの鼻唄が途絶え、次第に眼がとろんとしはじめる。
揺れる安楽椅子が、次第に停りかける。

コクンと眠りにおちるベッキー、その儘動かなくなる

——

22 同・一階の廊下

振鈴が鳴る——ノッソリと行くシーザー。

23 同・遊戯室の前

ドアが開き、セーラを囲んだアーメンガード、ロッテイ、女生徒たちが出て来る。

アーメンガード「上手ねえ、ダンス」

ロッテイ「そうよ、ラビニアよりうまいわ、ね、私にも教えて！」

セーラ「ええ、いいわ、ロッテイ」

囲まれて去るセーラ——

そのあとから出て来るラビニア、ガートルード、ジェシー。
ラビニア、ジッとセーラを見送る――

24 同・三階の廊下

独り上って来るセーラ、ドアへ――

25 同・セーラの部屋

一歩入ったセーラ、はっと足が停る。
床に抛り出されたモップ、バケツ――
暖炉の前の安楽椅子に、エミリーを抱いたベッキーが、ずり落ちそうになって眠り込んでいる。

セーラ「（低く）まあ……」

セーラ、そっと近づく――
軽い寝息を立てて眠っているベッキー。
突然、背后でボナパルトが叫ぶ。
ボナパルト「セーラ……セーラ……」
驚いて振り向くセーラ、ボナパルトに駆け寄る。
セール「シイッ……」
急いで、餌をやりながら、囁く。
セーラ「静かにしてあげて……（ベッキーを見て）きっと、ひどく疲れているのよ……そっと寝かしておいてあげるのよ」
ボナパルト、餌を食べはじめる。
セーラ、ほっと息をつくと、安楽椅子のベッキーの傍をそっと足音を忍ばせて、寝室へ行こうとする。
その時、ベッキーが抱いていたエミリーが手からすべり落ち、コクンと木靴に音を立てる。
はっと動きをとめて、見るセーラ。

ベッキーの眼が、トロンと半分開き、またとじる。
セーラ、そっと近づくとエミリーを拾い上げる。
ベッキーの眼が再びトロンと半分開く。
その視線に――ボンヤリ写っている人影。
次第に鮮明になり、セーラの姿になる。
見開かれるベッキーの眼――

ベッキー「お、お嬢様……」
仰天して椅子から立つと、慌てて坐っていた所を払う。
ベッキー「も、申訳けねえス……うっかり坐っちまって」
急いでモップとバケツをとり、
ベッキー「ごめんなさいまし……」
逃げるようにドアへ行きかける。
セーラ「あ、待って、ベッキー」
ベッキー「へ……？」
びくんと振返る。

セーラ「（微笑で近づく）ベッキー……帰らなくてもいいのよ、ここにいて」
ベッキー「そ、そんな……」
セーラ「お仕事、もう終ったんでしょ」
ベッキー「え、ええ……」
セーラ「じゃ、暫らくここにいられるわね、さ、どうぞ坐って」
セーラ、椅子をすすめる。
ベッキー「だ、だども……」
セーラ「心配しなくていいのよ。折角来て下さったお客様ですもの。さ、お菓子をいかが？」
セーラ、銀蓋の菓子皿とボンボン入れをテーブルに置き、促す。
茫然と見たベッキー、モップとバケツをおろすと、近づく。
ベッキー「あの、ほんとに坐ってもいいスか」

セーラ「（微笑）ええ、どうぞ、ベッキー」
　　　　ベッキー、おずおずと椅子の端に掛ける。
ベッキー「あの、私のこと、ほんとに怒ってねえスか」
セーラ「（微笑）全然……お客様が来てくれた事を喜んでいるのよ」
ベッキー「あの……院長先生にも……」
セーラ「（微笑）大丈夫、誰にも云いはしないわ……さ、遠慮なく
　　どうぞ」
　　　銀皿のケーキをすすめる。
ベッキー「は、はい……」
　　　おずおずと手を伸ばし、ケーキを取ると、コクンと頭
　　を下げ、口に運ぶ。
　　　一瞬、眼を丸くして叫ぶ。
ベッキー「ひやア、なんてうめえ……（慌てて口を押える）」
セーラ「よかった……ボンボンもいかが」
ベッキー「は、はい……」

ボンボンを口に運ぶ――ようやく落着いたベッキーの
眼がセーラの服を見る。
ベッキー「あの、おきれいな服ッすねえ」
セーラ、気づいて微笑する。
セーラ「お父様が択んで下さったの……とても好きな服よ」
ベッキー「私、前に田舎で、プリンセス様のお通りを見たス……お嬢様を見てると、あの時のプリンセス様にそっくりで……」
セーラ「まあ……私、自分をプリンセス様みたいだなんて思った事は一度もないのよ」
ベッキー「え……」
セーラ「だって、私もあなたも、同じ女の子でしょ……私が今のセーラで、あなたが今のベッキーだなんて、生れた時のただの偶然だと思うの」
ベッキー「グウゼン……？」

セーラ「そうよ……だって、もしかしたら、私があなたで、あなたが私に生まれてたかも知れないでしょ」
ベッキー「そ、そんな、お嬢様……」
セーラ「でもね。私、時々、他の誰かになったつもりになる事があるの……例えば、シンデレラになったつもり、とか……あのお話、聞いててくれたでしょ」
ベッキー「は、はい……私、自分が本当の灰かぶり姫になったような気がして……あとで独りで泣いてしまったス」
セーラ「まあ……でも、ベッキー、あのあとシンデレラは、とても幸せになれるのよ」
ベッキー「ほんとスか……私、おとぎ話なんて、聞いた事もねえスから……」
セーラ「（微笑）じゃ、あのあとのお話をしてあげましょうか」
ベッキー「（乗り出す）は、はい……」
セーラ「（話し出す）シンデレラは、台所で毎日辛い仕事を続けて

いたけれど、ある日のこと……」

突然、暖炉の置時計が時を鳴らす。

はっと見るベッキー。

ベッキー「いけねェす……私、もう台所へ戻らないと、また叱られてしまうス」

セーラ「まあ、折角来てくださったのに……そうだわ、これから毎日、お仕事が終ったら来て下さらない？」

ベッキー「え……」

セーラ「そうすれば、お話のつづきが出来るわ」

ベッキー「は、はい、喜んで……」

セーラ「あ、待って……お菓子を」

菓子を紙包みにして渡す。

ベッキー「こ、こんなに、勿体ねえス」

セーラ「いいのよ、ベッキー。さ、どうぞ」

ベッキー「有難うございまス……私……もう平気ッす……石炭桶が

いくら重くたって……台所で、いくら怒鳴られたって、我慢出来ます……だって、こんなに親切にして下さるお嬢様がいらっしゃるんですから……」

セーラ「ベッキー……」

ベッキー「じゃ、有難く頂戴しますです」

紙包みをエプロンの下のポケットへ押し込むと、モップとバケツを提げ、何度も頭を下げながら出て行く――

じっと見送って立尽すセーラ――

セーラのN「気の毒なベッキー……でも、あんなに喜んでくれたなんて……私は、やっとベッキーと話合えた事で、胸の中が温かくなるのを感じていました……」

おわり